
誰の所為でもなく

幸村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰の所為でもなく

【Nコード】

N69210

【作者名】

幸村

【あらすじ】

願いは叶うというけれど、そこに至るには泣けるくらい馬鹿なことをしていたりする。ひとりの女性に恋する健気な男の話です。

誰の所為でもなく1

「わ、私がこれを……?」

俺の手元にある一枚の書類をみて呆然と呟いた。

「昨日これを書いあと、寝ちゃったあなたを運んでここへ来たんだけど覚えてない?」

「えええっ!? だって昨日あなたと一緒にいたのは覚えてる……でも昨日まであまり話したことすらなかったのに結婚届なんて」

そう、俺の手元にあるのは結婚届。

今いる場所はプリンスホテルのダブルベッドの上。

「ごめんなさい。私、酔って無茶を言ったのね。その届け出は捨てるから迷惑かけて本当にごめんなさい」

ベッドの上で昨日着ていた服のまま、なぜか正座している彼女はガバツと土下座して謝った。

捨てる? とんでもない!

パニックっているせいか結婚届なんてものが都合よく手元にある不自然さをつつこまれなくて良かった。

記憶をとばしたのは睡眠薬を飲ませたからで、届け出もわざと読ませず書かせた。

この苦勞を無駄にしてなるものか！

「無理矢理で結婚届を書くはずない」

自分は書かせておきながら、だが。

「あなたのことは知っていたしこれから知りたいと思ったんだ」

これは事実。

五年もの月日を遠くから毎日みていたのだから。

彼女が他の男と仲良く話すところも、口説かれているのに気付かず笑ってるところも、この五年間腐るほどみてきたんだよ。

「でも付き合ってもいないのに：むぎゅ」

彼女の口に手を置いて言葉を発するのを遮った。

「好きなんだ」

我ながら今更だと思う。

でももう待てないんだ。

「結婚届は今すぐにださなくていい。付き合ってくれませんか？」

彼女の細い肩を抱き寄せて温もりを感じると答えもわからないのに安心する。

矛盾だらけだ。

今まで遠くからみていたのにこれは夢じゃないと、現実なんだと思
い知らされる。

(俺を……)

「俺を好きになって」

心の声はかすれたように小さくて心細いものだった。

それでも胸の中に抱き込まれた彼女に届くのには足りていたらしい。

ビクッとした彼女をみると耳がほんのり赤くなっている。

「どうして私なんか：私なんて駄目だよ」

震える声すらも愛おしい。

その声も奪いたいほどなのに。

「美沙子さんじゃないと駄目」

他の女で我慢できるなら苦労しない。

むしろこんな俺にしたのは君なんだから。

「なっなにいつてるのよ！そういうことみんなにいつてるんで……
むぎゅ」

彼女の口を口で塞ぐ。

（柔らかくて甘い。噛み千切ったら血もあまいのかな）

あまりの気持ちの良さに思わず夢中になっていたらしい。

らしい、というのはキスし終えて満足感に浸っている俺の腕の中で彼女がぐったりしているから。

「あなたにしか言えない。ねえ：」

涙目になって潤んだ瞳。

不安そうな表情も息を途切れ途切れにするのも全部。

「ねえ美沙子さん、信じてよ。これ以上手だされなくなかったら」

全部俺の前だけにしてほしいんだ。

こんな独占欲があることも知りたくなかった。

君に逢うまでの俺にどんなに戻りたかったことか。

適当にもてたし遊ぶ女は勝手に寄ってきたし。

なのに君には惨敗で。

情けない自分がみじめだった。

だからさ、こんな俺にした君が責任をとってよ。

「ウソ。美沙子さんが好きになるまでしないって約束するから」

真っ赤になる美沙子さん。

そのとか、でもとか言いながらも必死になって考えてくれてるのがよく分かって嬉しくなる。

「その、ええとその：はい。よろしくおねがいしま、す？」

首をかしげた疑問系の了承だけど俺には充分だった。

五年間指くわえて見てるのに比べれば破格の前進だ。

「駄目：我慢できないかも」

「我慢てなにを：むぎゅ」

数分後。

我慢できずに再びキスして押し倒してしまった美沙子さんに殴られて。

赤くなった頬を冷やしながら、帰ろうとする彼女の服を掴んで帰らせないようにする俺と彼女の攻防戦がはじまったのだった。

誰の所為でもなく2

鈴木美沙子。

32歳にして結婚を前提に付き合う人ができた。

できてしまったというほうが正しいけど。

佐々木と一晚過ごした前日、職場の飲み会でいつも通り控えめにチユーハイをちびちび飲んでいたはずだった。

30歳すぎると急激にアルコールに弱くなって。

だから余程のことがない限りハメを外さないよう気をつけてた：んだけどな。

「鈴木さん隣いいかな」

自問自答しながら食堂で日替わりランチを食べていたら、悩みの原因である佐々木浩史が隣に立っていた。

「はあ：どうぞ」

クスツと笑い、この間はどうもと話かけてきた。

ホテルで逢った訳の分からない佐々木とは別人のように大人びている。どこぞのブランドで購入したのであろう品のよいスーツにネク

タイがビシッと決まっている。

日に焼けた肌にはどよく引き締まった顔。

あまり関わることはない部署だし、本来穏やかで将来有望な佐々木と付き合いたいと思う女の子たちは沢山いるのに。

（何故私？）

思わず見つめているとさりげなく耳に顔を近づけてきた。

「そんなに困った顔されるとキスしたくなる」

途端にキスされたことを思い出して顔に血が集まるのを感じた。

「からかうなら行きますよ」

「からかってないしー。疑い深いんだから」

ボソッと呟いてるけど聞こえてるからね。

「佐々木さんと接点なかったじゃない。信じてゆうのは無理あるよ」

むしろ何事も石橋を叩いて叩きまくって渡る生真面目な私に、いかにも遊んでますタイプの彼から結婚前提とか言われても：30過ぎて騙されたら立ち直れないんだからね。

「その件だけど今日空いてるならデートしよう」

「でえと？」

「お付き合いするならお互いを知らないかね」

本当にしれっと話すよなあこの人って。

ホテルで迫ってきた彼を知らなかったら流すけどあの時の彼はなん
ていうか。

「：それも無理？」

不安そうに尋ねる彼の手がスーツのズボンをぎゅっとにぎっている。

私相手にあの時も緊張してたのが可愛かったんだ。

「ううん行く」

ほら、私のこんな一言で目が輝くの。

普段の落ち着いている彼が嘘のように子供ばくみえる瞬間かもしれない。

（たまには当たって碎けてみてもいいか）

「速攻で仕事終わらせてメールする。」

宣言したあとになにやら意気込んで立ち去っていった。

なんだろうあの人。

なんていうか：へんなひと。

ものすごく可笑しくなって一人笑うのを誤魔化すために、お茶を飲むふりをして顔を隠した私がいた。

誰の所為でもなく3

佐々木浩史。29歳。

五年間片思いだった鈴木美沙子さんと念願叶って付き合うことになったのだが。

そんな彼は仕事の合間も頭の中は美沙子さんで埋め尽くされている。

（俺の美沙子さんデータベースによると映画はアクションより恋愛系。サスペンスやホラーは見れない。

いや待てよ。ホラーにして美沙子さんに縋りつかれるのもありだな。

おっと入力ミス。

浮かれすぎ落ち着け。）

「佐々木くん、今いいかな？」

（いいわけない。初デートの対策練ってるから邪魔すんな）

とはいくら苛ついていてもいえるはずもなく、穏やかな表情を一枚自分の顔に貼り付けて振り向くと美沙子さんの同僚の佐伯瑞穂が待っていた。

「どうしました？」

「ええ、ちょっと：席はずせるよね」

瑞穂は最後のほう声を抑えて有無を言わせない笑顔で連れ出した。

「佐々木がにやけてるのみて上手くやったのは分かった。で、どうなったのよ」

興味深々で聞いてくる瑞穂の手には缶ジュースが握られている。常々瑞穂から美沙子さん情報を流してもらっていたため、缶ジュースはその情報料である。

「まずはデートすることになりました」

「ふうん。佐々木のヘタレ具合じゃ無理かなーとは思ってたけどやっ
と動いたか」

ヘタレは地味に落ち込むからやめろと何度いわせる気だよ。
しかし今日の俺はいつもの俺とは違うのさ。

「なんとでも。今日はとにかく早く仕事片付けたいんですよ」

さっさと仕事に戻らせろ。

話してる時間が惜しいんだよ。

「あはは分かったわよ。ただ一個だけ言いたくてさ」

そして瑞穂はにっこり笑って続けた。

「あんたは頑張らなくていいからね」

ガンバラナクテイイ？

「佐々木はたまにここまでするかっけくらい思い詰めてやりすぎるから」

心配なのよねえ、と缶ジュースを手のひらで転がして言った。

「美沙子さんに迷惑かけるような真似は…」

「分かってるわよ。そうじゃなくて佐々木はそのままでもいいからっていいだけ。肩に力いれなくてもいいんだよ」

別に気負ってるつもりもないんだが。

「無自覚なのが佐々木らしいわね」

去り際、瑞穂にほどほどにしなさいよーと忠告を受けた。

再びデスクについてパソコン入力しながらふと思いついた。

（今日はピンクの服きてたっけ。あ、そうだ）

「美沙子さんおまたせ」

待ち合わせ場所に立っている美沙子は携帯を閉じて顔をあげた。

それから俺をみて息を飲み込んだ。

「なに、その、花、たば」

あれから早めに仕事終わらせて速攻で花屋に行き、美沙子さんがきいている服に合わせて花を購入した。

花屋の店員にノロケやら細かい注文やら相談をして一時間以上もかけた代物で。

「美沙子さんぽいかなーって。このミニバラとか」

「……」

美沙子さんはぽかんとしてえ、とかうん、とか言ってるけど嬉しそうじゃないな。

世の中の女性は花が好きなものだと思ってたけど好きじゃなかったのかもしれない。

（美沙子さんデータが頼りにならないとは）

落ち込みはじめた俺に気付いたのか美沙子さんは慌てて近寄り花束を受け取ってくれた。

「嫌なわけじゃなくてびっくりしただけ。こんなに花貰ったのはじめてだから。すごく綺麗」

頬を染めて花をみつめる姿はもっと綺麗で。

自分の選択にグッジョブと密かに親指をたてた。

「映画みにいこうか」

と、両手で花を抱えて歩き出したのをみて俺は大きな失敗をしたことに気づいてしまった。

（これじゃ手を繋げないじゃないか！）

佐々木が瑞穂に忠告されたことの本来の意味に気づく日はやってくるのだろうか。

誰の所為でもなく4

「いい加減にしろなさい」

私は隣にいる男についてキレた。

付き合うこと半月。

この男は金銭感覚がおかしい。

おかしくなるのは私に限ってのことだと言い張ってるけど。

目の前には某高級ブランドのネックレスと指輪。総額うん十万円。

ウィンドウショッピングのつもりで、いいなー綺麗ねーって言っただけなのに彼は本気で買おうとしていた。

「だって美沙子さんに似合いそうなんだもん」

ギロリと睨むと慌てて口を噤んだ。

「だからって貢ぐようなことしないで。本気で欲しいなら自分で買うわよ！」

「俺が買ってあげただけなのに」黙れというかわりに両方の頬を思いっきりつねる。

いひゃい痛いとうるさいけどいい加減やめてほしい。

庶民の私には心臓がバクバクして刺激が強すぎる。

初デートの日なんてドラマでもみかけないくらいのピンクの薔薇をメインにしたやけにでかくて重い花束を渡してきた。

それからケーキが食べたいといえば棚の端から端まで大量に。

携帯が壊れたといえはお揃いの最新機種を。

少し思い出すだけでも恐ろしい。

友人の佐伯瑞穂に話すと爆笑されるけど、笑い事の域を越えてるから。

「み、美沙子さん：怒ってる？」

身長180センチ超えた彼なのに落ちこむ姿が犬にしかみえない。

しっぽがきゅうんって縮こまってる。

「ごめん。でも俺、美沙子さんが喜ぶのがみたくて」

もう充分喜んでる。

一緒にこうしているだけで満たされていることがどうして伝わらないんだろう。

「私が一番欲しかったもの何だかわかる？」

彼にはわかるだろうか。

私がずっと手に入れたくて仕方なかったものが。

「じゃあ佐々木くんが一番ほしいものって何？買ってあげるから教えて」

彼は真剣な表情で考えていたけどしばらくして目を見開いた。

「美沙子さんがほしかった。他にいらない」

いつも彼の言葉は直球で。

そのたびに泣きたくなるのをあなたは知っているんだろうか。

不安なときに人の温かさを感じると安心するから。

ただ感じたくてそっと佐々木を抱き寄せる。

「ずっとそばにいてくれる人がほしかったの」

いつか見つけられるだろうか。

もしかしたら誰かみつけてくれないかなって。

他力本願して気付いたら30才こえちゃったけど。

「私のこと好きになってくれてありがとう。私も佐々木くんのこと好きだよ」

そのときの佐々木の顔ったらなかった。

一瞬泣きそうになって、真っ赤になってった。

やっぱりこの人ってなんていうか：可愛い。

最初は自分と全く違うタイプの人だから苦手だったのに。

印象なんて当てにならないものなんだ。

「覚えてる？最初の約束」

ふと佐々木が尋ねてきた。

赤くなったまんまの耳が気になるけど表情は真摯で。

「俺のこと好きになるまでは手はださないってやつ。さ、行こうか」

手をぐいぐいひっぱってタクシーの中にポイツと連れ込まれた。

「プリンスホテルまで」

全然わかってない。

なんだってこうも感覚がずれてるのかな。

そして。

タクシーの中で行き先をあいでもないこーでもない揉めて運転手に放り出された私たちだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6921o/>

誰の所為でもなく

2011年9月8日08時30分発行